砂の中に手をかくす

津守　真

毛布をかぶる

前二号、「遠くを眺める」「水をあふれさせる」で述べたM郎は、次第に、好きなところに歩いて行き、好きなことをしはじめ、自由感を体験していった。

ある日、この子は、部屋の隅で、毛布を頭からかぶって平たくなっていた。打ちひしがれて、他人から見られたくないという風だった。そして自分の手で顔をはげしく叩き、大声をあげた。私が他の子どもとふざけて笑っていたのが理由らしい。こうい

うとき、この子は自分が悪いことをしたと思うらしい。他人から見えないところに自分をおき、自分を叩いて傷つける。私はそのことに気付いて、この子が悪いのではないことを知ってもらいたいと思い、子どものそばにいった。この子は毛布の中から手を出して私の手にふれた。このまえ私が紐を結んだのを喜び、帰り際もその紐を欲しがったことがあったので、私はこの子とたのしむ時をもちたいと考え、また紐を結んだ。この子はそれに手を出した。そして私の手にそっと触れて私を引き寄せた。

半透明のセロハンをかぶる

幾日かの後、この子は、半透明のセロハン紙をかぶってホールを歩いていた。かぶったまま私と追いかけっこをして遊んだ。毛布をかぶるのではなく、外が見える半透明のセロハン紙であることは、子どもの心に変化が生じていることを示すものであろう。

砂の中に手をかくす

それから数週間後、暮れの寒い日に私はこの子と一緒に商店街のビルの谷間の公園の砂場にいった。子どもは手を砂の中にいれ、その上から白砂をサラサラと落とした。私も白砂を落とすと、この子は砂の中から手を出して手のひらで白砂を受け取っ

た。私の砂を受け取ってくれたことが、私の思いを受けてくれたように思えて、私はこの子の手をこの上なくいとおしく感じた。そして、砂の上からその手に触れ、砂の中に私の手をいれてこの子をまさぐった。子どもは口元を緩め、私の手に触れてきた。手は、身体の一部にとどまらず、子どもにとっては自分自身と言ってよい。一緒に手をふれて遊んだ。

「砂の中に石をかくす」ことについて、以前に私は「保育の体験と思索」（p128）の中で考えたことがある。そのとき、子どもが手に持っていた物を砂に埋めたのは、叱られた場面だった。私に向かって石を投げた子どもに「石をぶつけるとガラスが割れるから投げないで」と私が言ったとき、その子は「割れないもん」と私に石を見せ、一瞬の後に砂場にかけてゆき、砂の中に石を埋めたのだった。「叱られて後ろめたいような気持ちになると、そういう自分を、見えないところにいれてかくす。……他人の目に見えないように、おおいをかけてその下にいれること、すなわち、見えない内部の世界を作るのは、子どもに共通のことである。人の心の内部の秘密の部分といってもよく、」「このような内側の世界は、明るい外側の世界と比べると、人に見られることをはばかる暗さをもった世界である」。この子には叱られる理由は何もなかった。それにもかかわらず、この子は叱られた自分を後ろめたく思い、かくしたく思った。

M郎のことを考えたとき、この子はことばが話せない、ときどき大きな声を出すというだけで、他人から拒否される体験を積んでいる。この子にはどうしようもないのだが、自分が悪いのだという風に思っている。そのことがこの子を後ろめたく感じさせ、砂の中に自分の手を埋めてかくしてしまう。「あなたには何も悪いことはない。堂々と明るいところを一緒に生きてゆきましょう」と、大人が子どもに伝え、子どももそれを納得すれば、もはや自分を暗いところに隠すことはないだろう。

私はこの子とできるだけ長い時間こうしていたいと思っていた。そして私の思いを、私がいることによって子どもに伝えたいと思った。一時間半位、公園の砂場で一緒に過ごした。この子が声を上げたとき、私は学校に帰って弁当を食べようと立ち上がった。この子もすぐ立ち上がり、石の縁の上を歩き、ところどころ走りさえして、まっすぐに学校に帰った。

正月の休みが終わった日、この子の母が笑いながら来た。休み中子どもの調子が良くて、あっと思う間に冬休みが終わりました、あの公園にも数回行って良く遊びましたと言った。この子はひとりで校庭の木の茂みの間（哲学の小径と私共は呼んでいた）を歩き、いったり来たりしていた。一人で教室にはいり、裏庭でブランコに乗ったりして自然に動いていた。

手に白い絵の具を塗る

それから数日後、この子は、地下室に通じる扉に行き、地下にゆきたがった。私は、公園に誘いたかったが、この子はどうしても地下にゆくことを主張した。地下の倉庫に行くと、ポスターカラーの箱から白色の絵の具の瓶を出した。私にあけてくれという。私はここで絵の具を出したら困ると思い、蓋をあけるまねをした。この子は怒った。そして自分で蓋をあけた。自分の手であけたところがよかった。絵の具を指ですくい出し、白い絵の具を両手にしっかりと塗った。そして立ち上がって職員室にいった。砂場で砂に埋めたのもこの手である。黒い絵の具ではなくて白い絵の具をこの子は選んだのもよかった。私はそのことが嬉しくて、この子の顔をなめ、ふたりでなめっこのふざけっこをして笑った。そうしている間に、私は地下の倉庫に色セロハンがあることを思い出した。彼は地下にそれをとりにいきたかったのかもしれない。そのことを忘れていた。地下の倉庫にいったら困ると思うと、子どもには理由があるのかもしれないのに、そのことは全く意識に上らない。どうしてだろう。意識というのは、ひとつのことに囚われると、他のことは隠されてしまうらしい。他の人に頼んで色セロハンを取ってきてもらった。この子はすぐに半透明のセロハンを顔にかぶった。そしてまた私とふざけっこをした。シチューができていて、三杯おかわりをした。そして私を離れていった。そのあと、またシチューを食べたとのことである。

その後、この子は顔に何もかぶらないでひとりで自由にのびのびと走っていた。数カ月後、この子は六年生を卒業した。

小学校の時期を、私はこの子と一緒に過ごして、彼の周囲に対する繊細な心に触れ、自分を主張する強さを見た。そして、ともすると受け入れ難い行動をも表現とみることによって、一段階ずつ次の生活が開かれることを学んだ。このことは障碍をもつ子どもだけのことではない。沢山の子どもたちが、現代の学校と社会の中で悩みを負っている。これは管理と規制の強化によっては決して解決しない。だれかが子どもと一緒に、子どもの表現をよく見て、思いきって子どもの生活をつくるならば、その同じ子どもが学校と社会に貢献する者となることは疑いない。